

千葉県子どもの生活実態調査（テーマ別集計概要）

※速報版に記載されていない【世帯タイプ別】【貧困継続状況別】【保護者国籍別】の調査結果の概要。

1 【世帯タイプ別】

ひとり親世帯とふたり親世帯、また祖父母と同居している世帯としていない世帯にどのような差異がみられるか比較を行った。

■クロス軸の設定

父母及び祖父母の同居・非同居の状況から以下4グループを作成。

○世帯タイプ分類	祖父・祖母いずれも非同居	祖父または祖母と同居
父母いずれも同居	ふたり親（二世帯）	ふたり親（三世帯）
父または母のみ同居	ひとり親（二世帯）	ひとり親（三世帯）

世帯タイプ別では、ひとり親世帯（二世帯）の25.5%、ひとり親世帯（三世帯）17.3%が困窮層であった。（※全体では困窮層が6.9%、周辺層が12.3%）

困窮層・周辺層・一般層の割合（世帯タイプ別）

	ふたり親 （二世帯）		ふたり親 （三世帯）		ひとり親 （二世帯）		ひとり親 （三世帯）		全体（参考）
	人	割合	人	割合	人	割合	人	割合	割合
● 困窮層	195	5.2%	28	4.7%	82	25.5%	29	17.3%	6.9%
● 周辺層	397	10.5%	69	11.6%	92	28.6%	41	24.4%	12.3%
小計（①+②）	592	15.7%	97	16.3%	174	54.1%	70	41.7%	19.2%
● 一般層	3181	84.3%	498	83.7%	148	45.9%	98	58.3%	80.8%
合計（①+②+③）	3773	100.0%	595	100.0%	322	100.0%	168	100.0%	100.0%

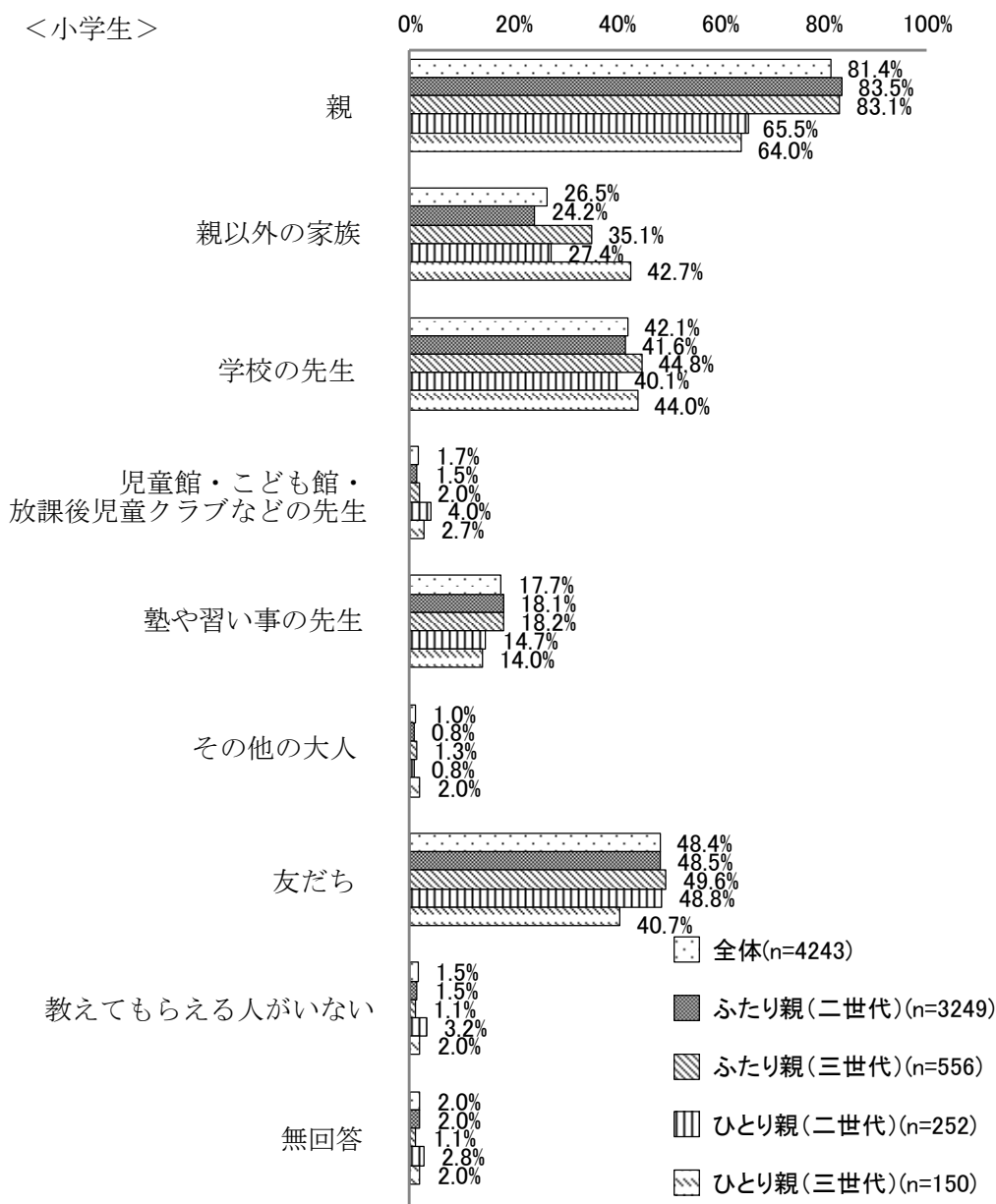
■結果概要

- ・小学生において、勉強がわからないときに教えてもらう人として「親」を挙げる割合は、ふたり親世帯では約80%程度であるのに対し、ひとり親世帯では約65%となっている。（図表1）
- ・ひとり親（二世帯）世帯において、「民間の賃貸住宅」の割合が約40%となっているのに対し、ふたり親世帯やひとり親（三世帯）世帯ではいずれも10%未満であり、大きな差がみられる。（図表2）
- ・現在の生活が「やや苦しい」「大変苦しい」とする割合は、ひとり親（二世帯）で約60%にのぼる。（図表3）

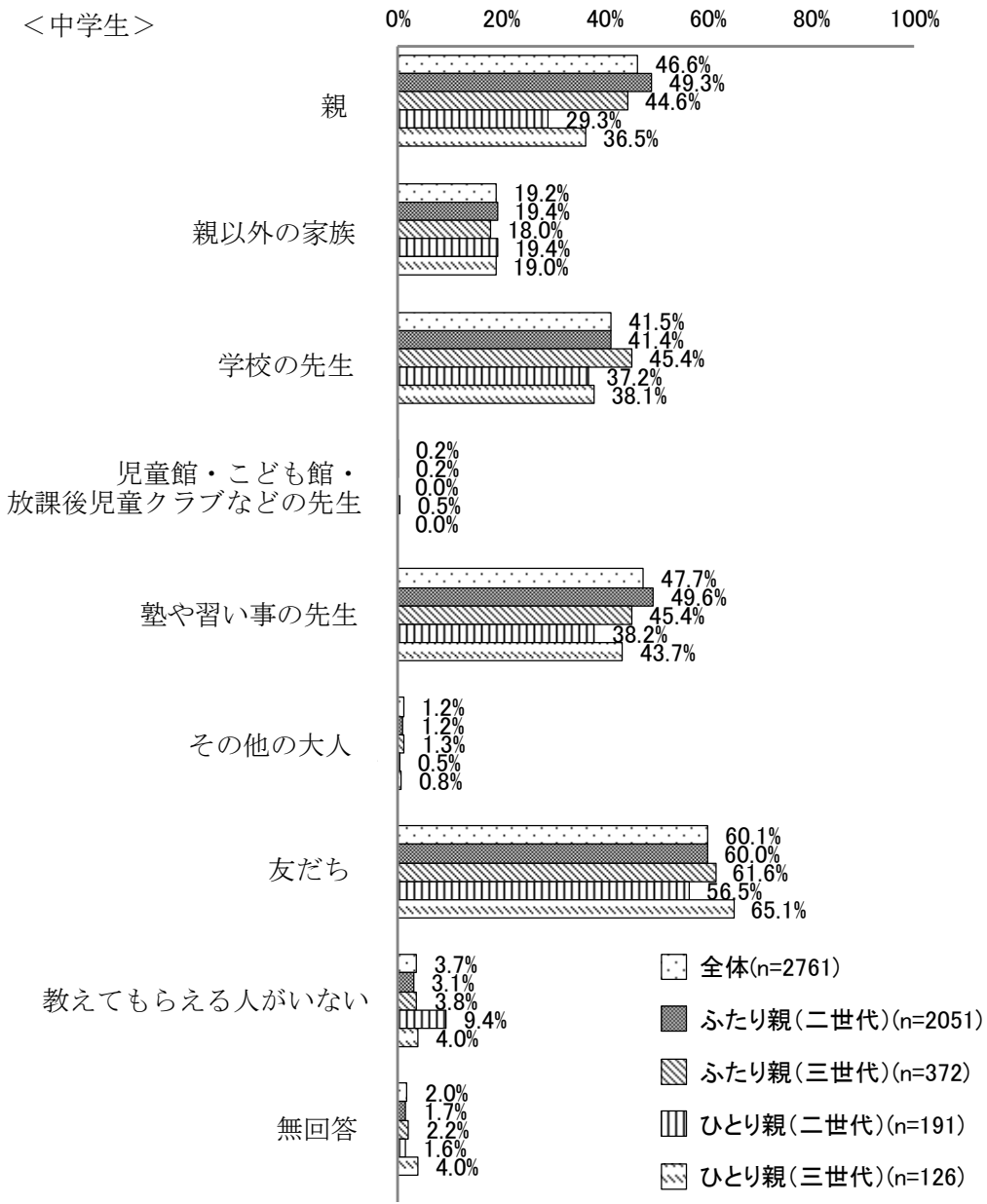
- ・ふたり親世帯に比べて母子世帯の場合、母親が正社員・正職員として働いている割合が高い一方、約30%がパート・アルバイトとして働いており、収入が低い層も一定数いることが推測される（図表4）
- ・父親ではふたり親世帯と父子世帯とで就業状況に大きな差はみられず、いずれも正社員・正職員として働く割合が約70%程度となっている。中学生の父親の労働時間は、ふたり親世帯に比べると父子世帯で短い傾向にあるが、それでも40時間以上が90%以上を占めている。（図表5、図表6）
- ・ひとり親世帯における母子・父子・寡婦福祉資金の利用状況をみると、約20%が「制度等について全く知らなかった」と回答している。（図表7）

■関連項目

図表1 【子ども】勉強がわからないときは、誰に教えてもらうか

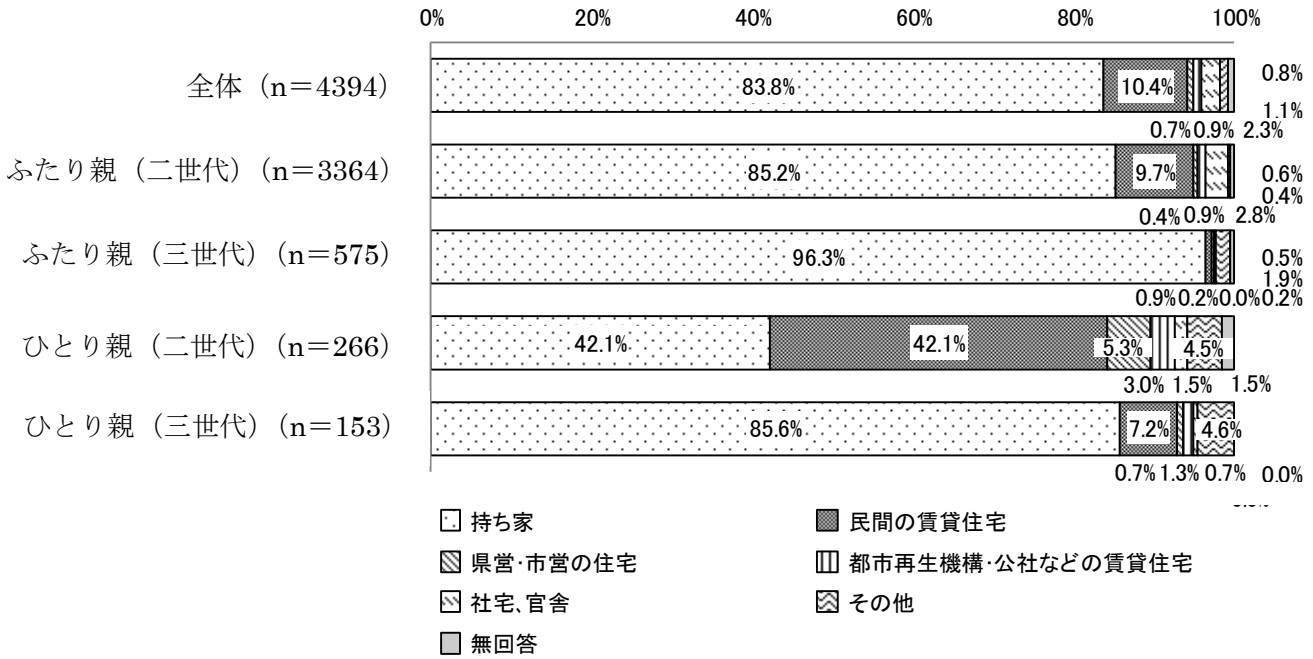


<中学生>

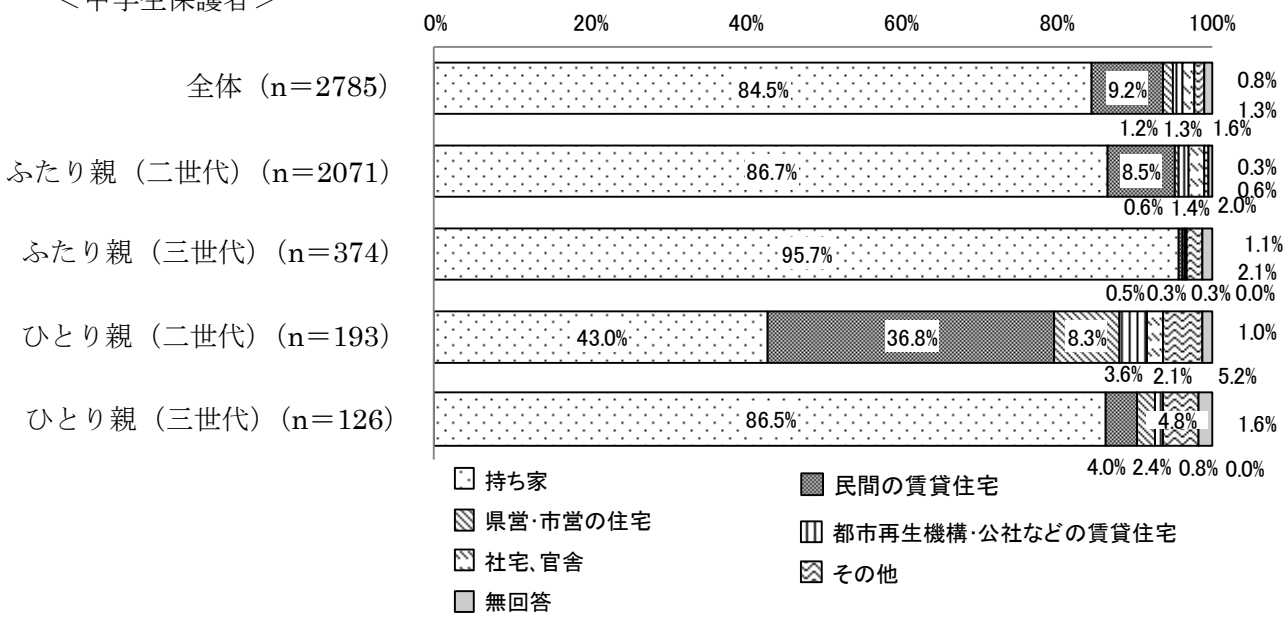


図表 2 【保護者】住居の形態

<小学生保護者>

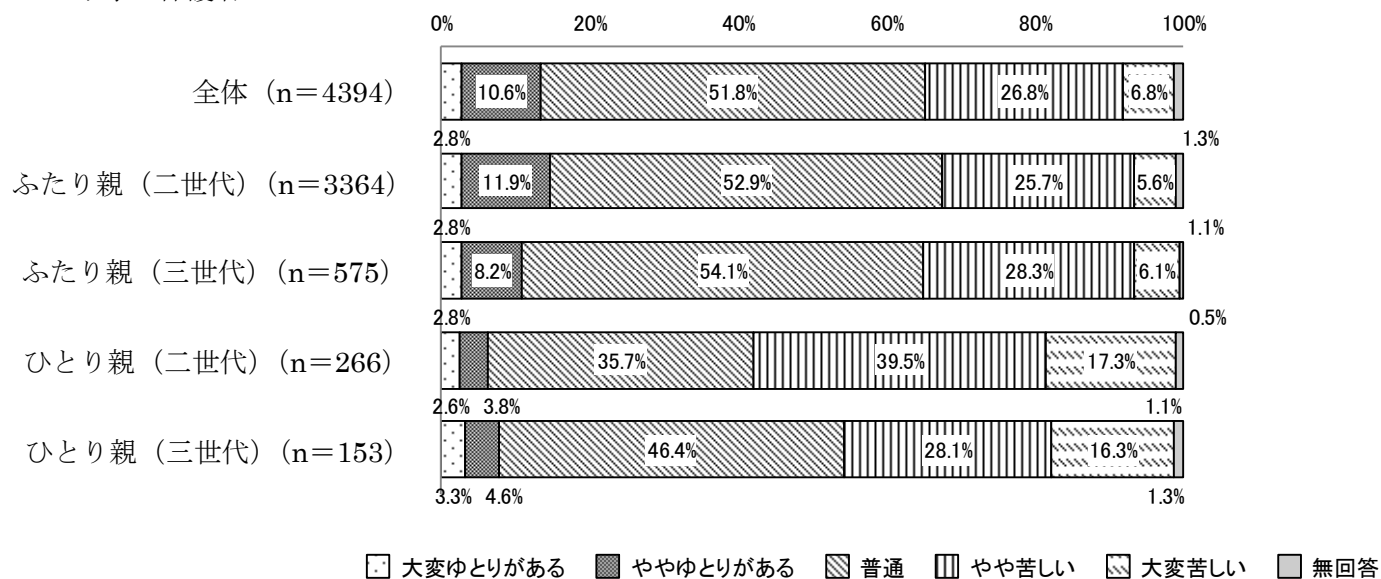


<中学生保護者>

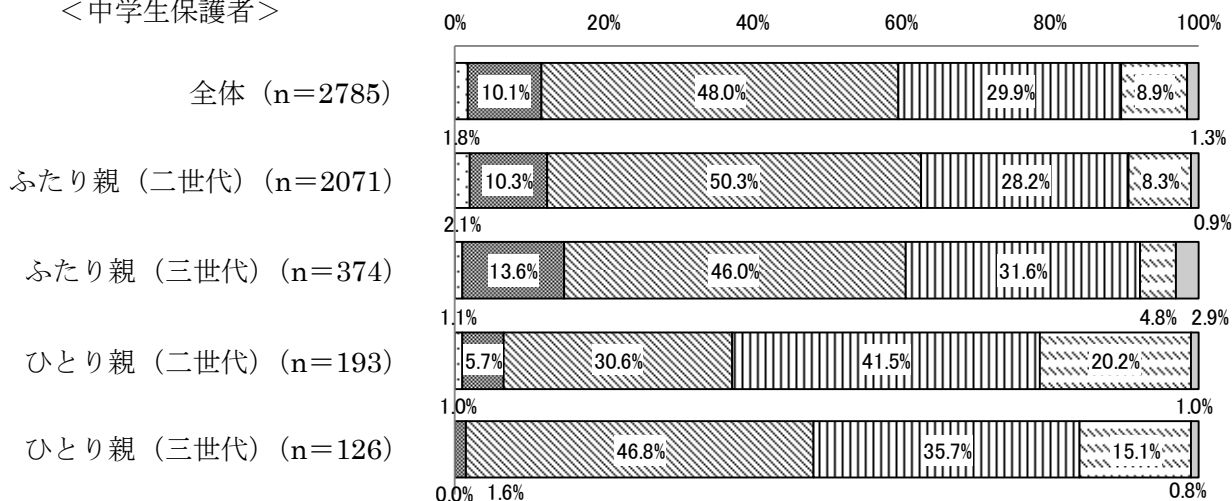


図表 3 【保護者】現在の暮らしの状況について

<小学生保護者>

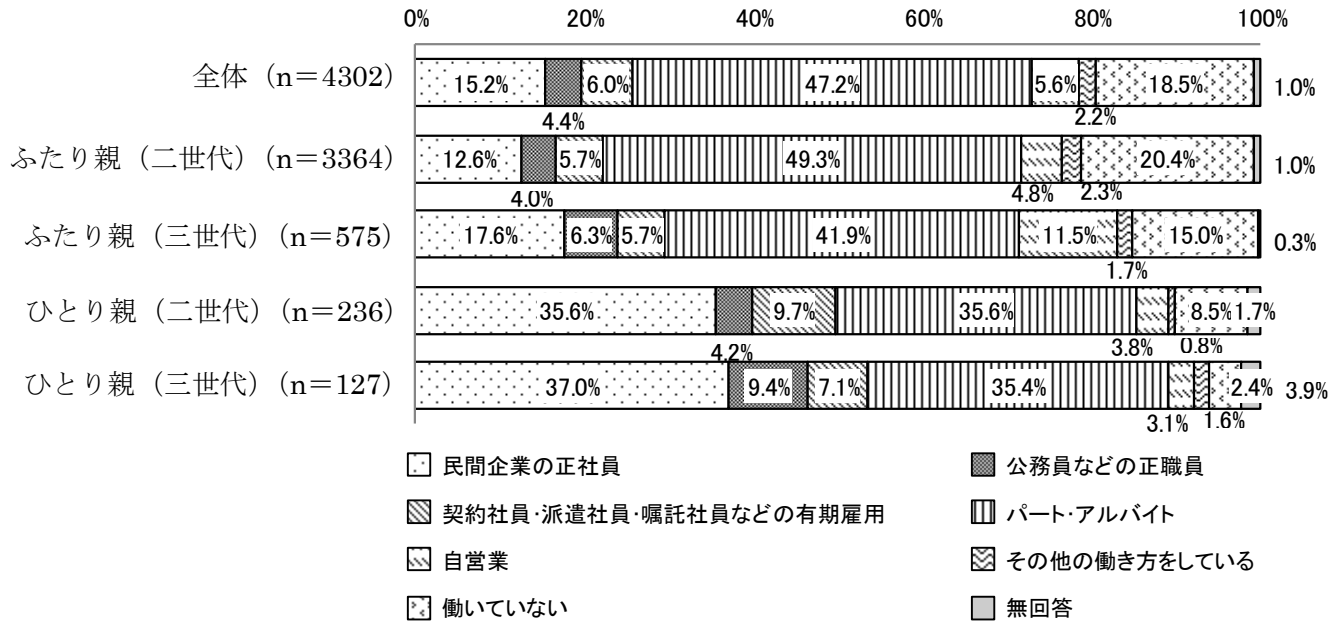


<中学生保護者>

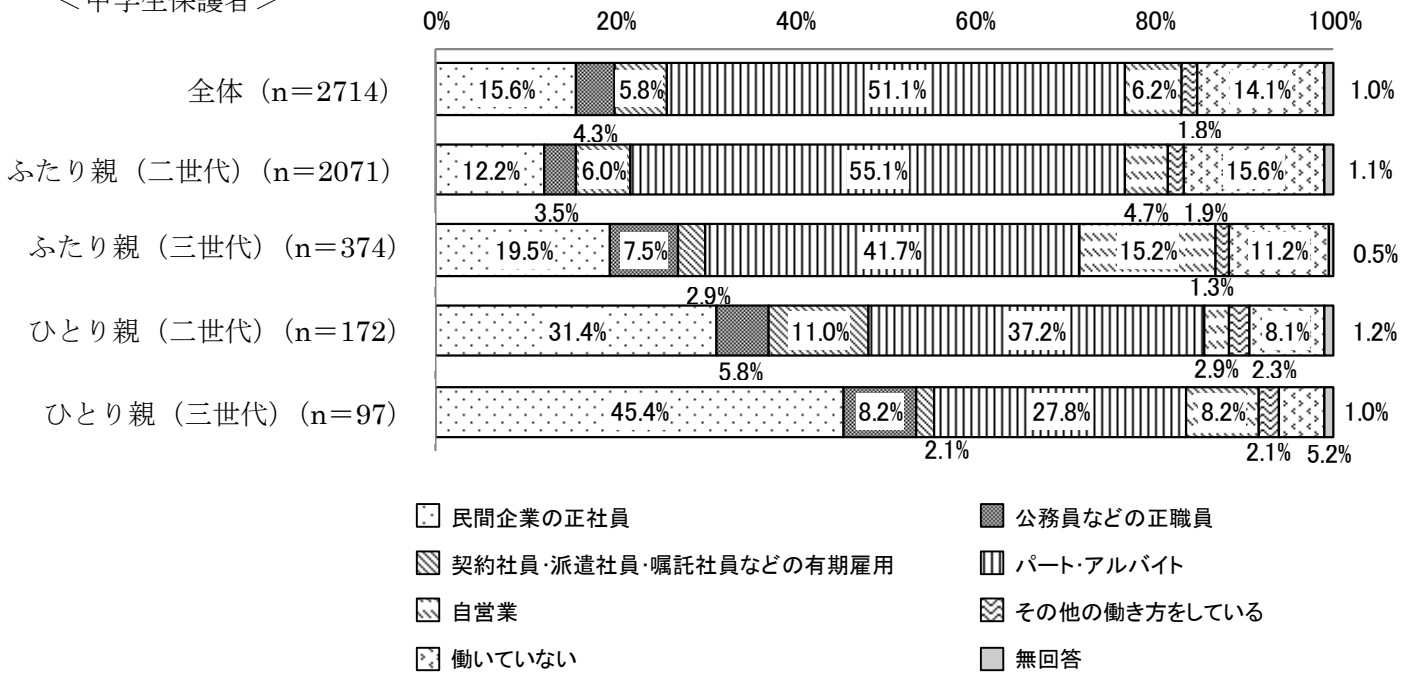


図表 4 【保護者】母親の現在の就業状況

<小学生保護者>

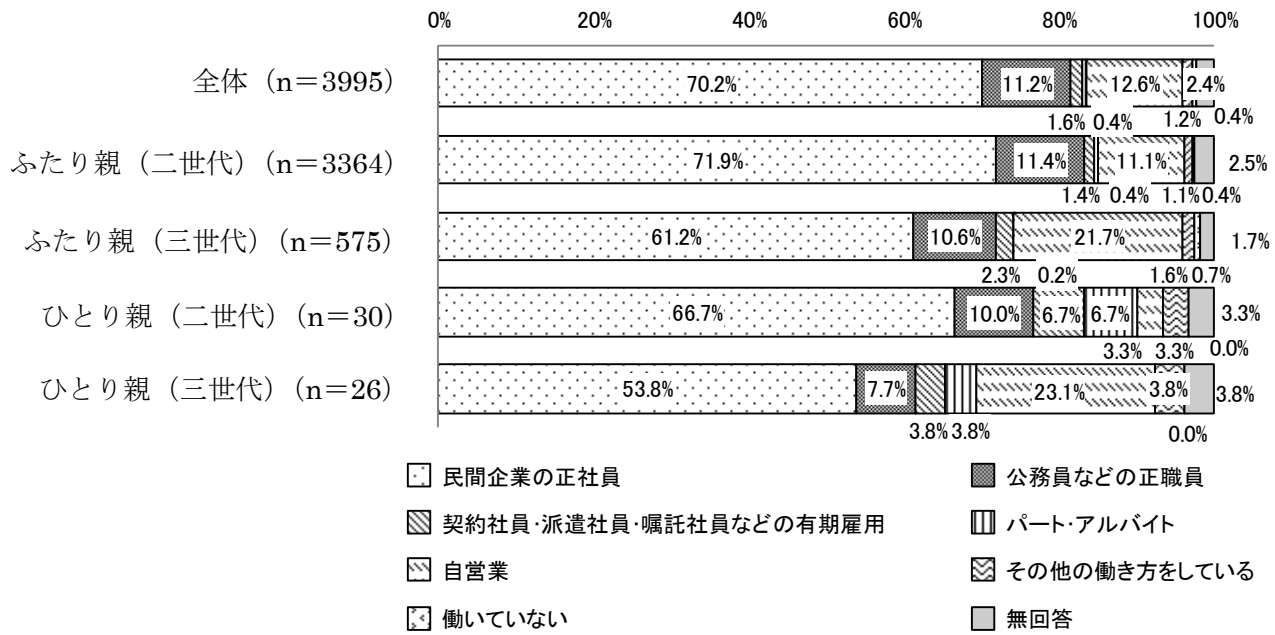


<中学生保護者>

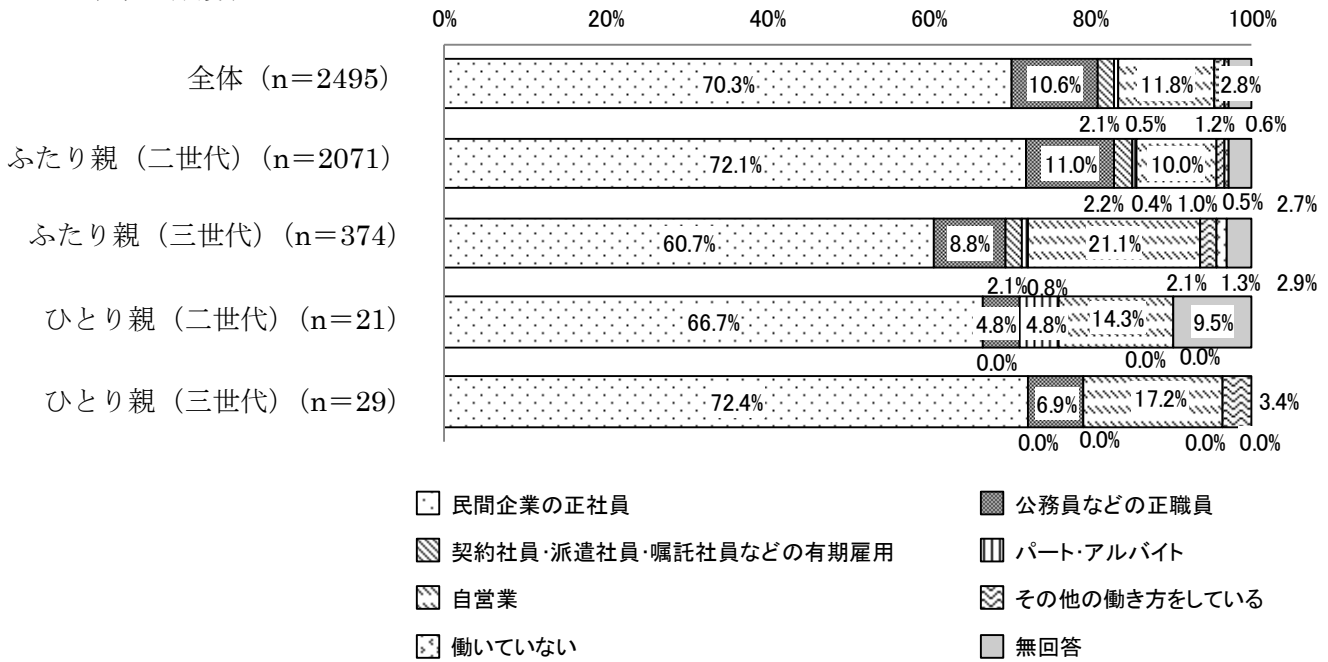


図表 5 【保護者】 父親の現在の就業状況

<小学生保護者>

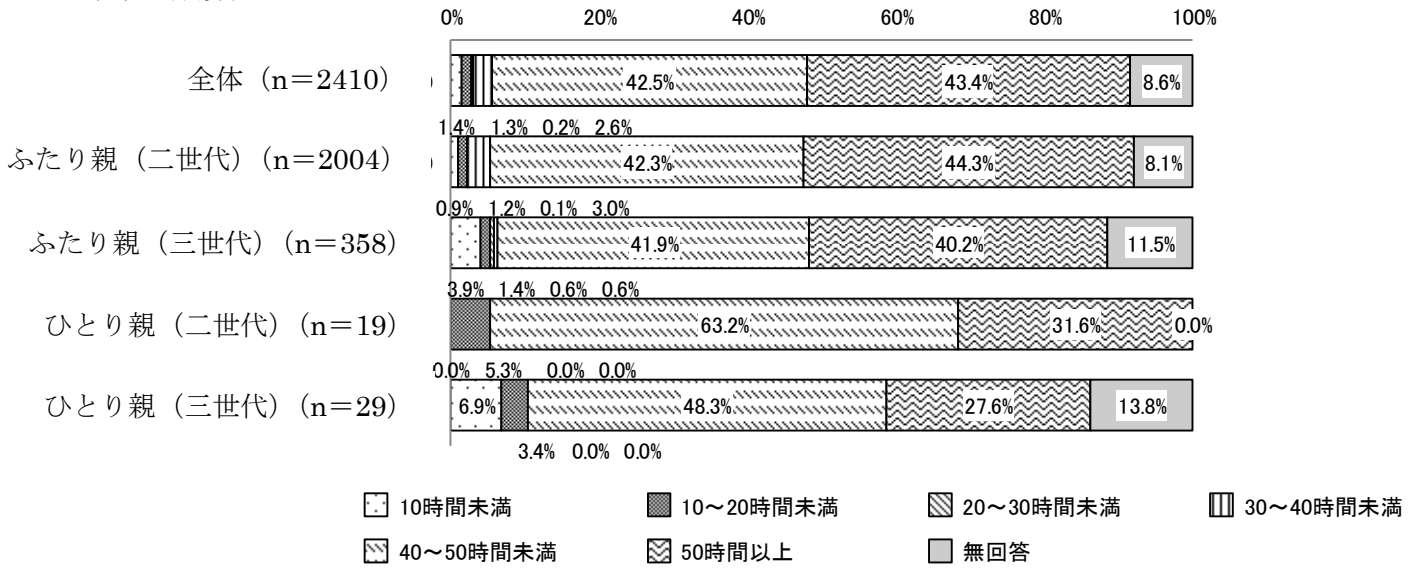


<中学生保護者>



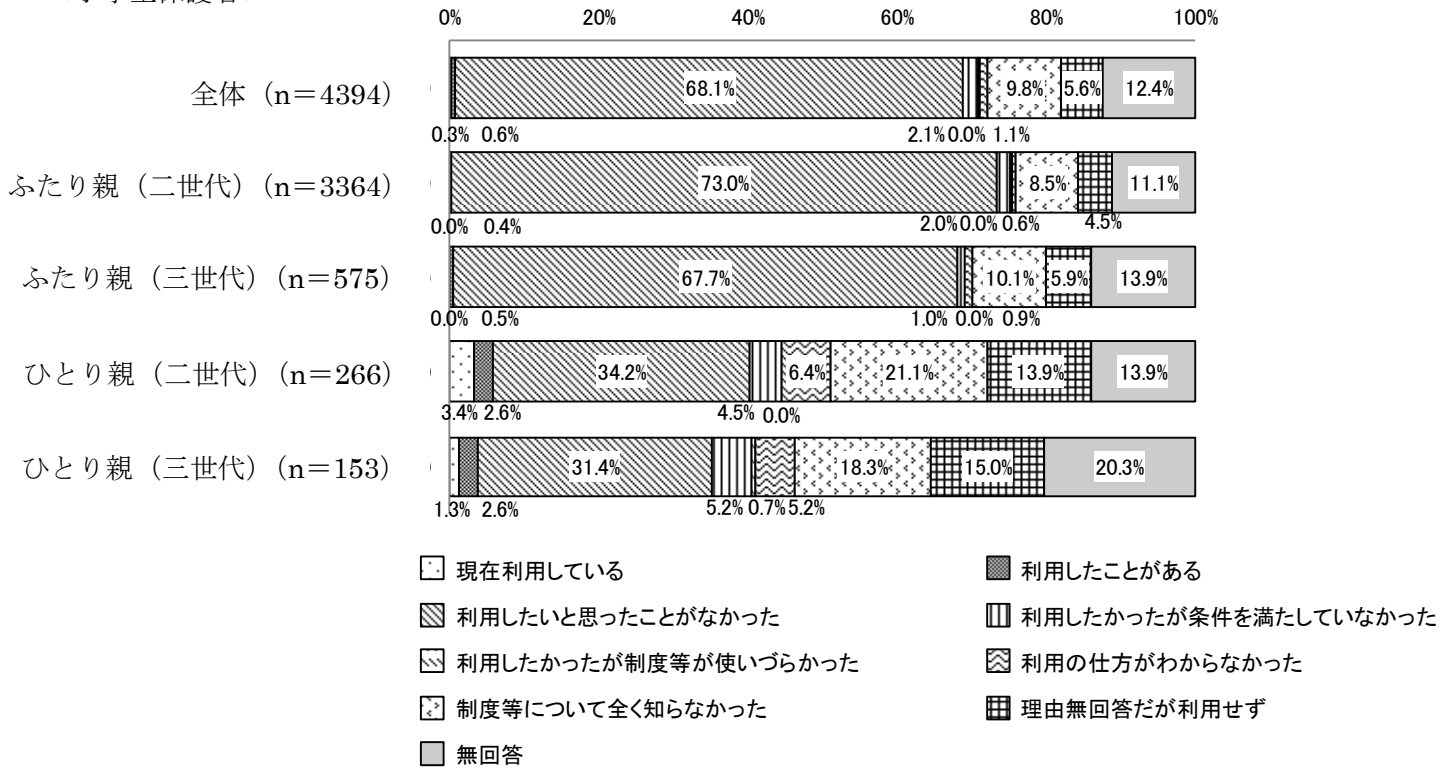
図表 6 【保護者】父親の一週間の平均労働時間

<中学生保護者>

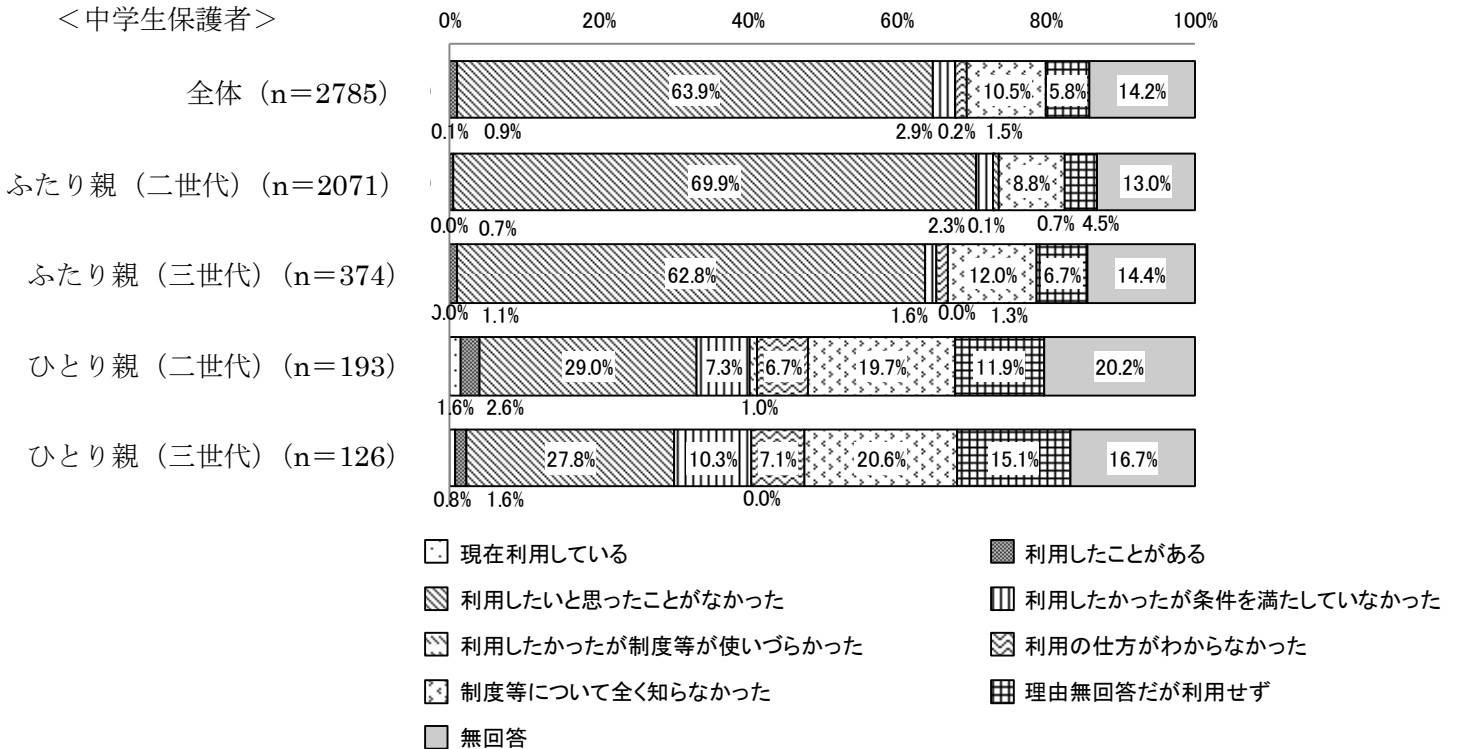


図表 7 【保護者】 母子・父子・寡婦福祉資金の利用状況

<小学生保護者>



<中学生保護者>



2【貧困継続状況別】

貧困が続いていた家庭の子どもとそうではない子どもに違いがあるか、貧困の継続状況の違いによる比較を行った。

■クロス軸の設定

生活困難度と「10年前の暮らし向き」から以下4グループを作成

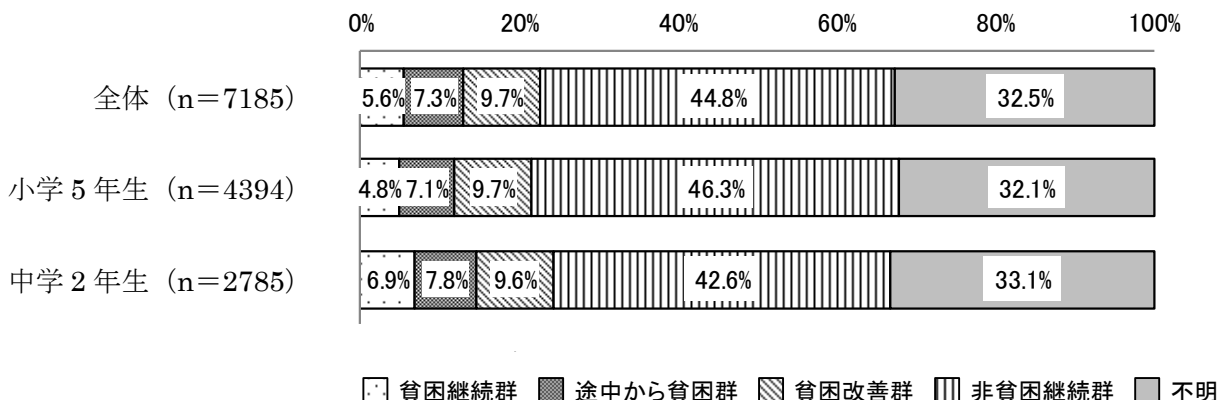
		10年前の暮らし向き	
		大変苦しかった やや苦しかった	大変ゆとりがあった ややゆとりがあった
生活困難度	困窮層・周辺層	①貧困継続群	②途中から貧困群
	一般層	③貧困改善群	④非貧困継続群

■結果概要

- ・ 貧困が続いている場合、途中から貧困になったケースに比べて保護者自身が成人前に親からの暴力などつらい経験をしている割合が高く、自己肯定感が低い傾向にある（図表9、図表10）
- ・ 貧困が続いている場合、保護者が配偶者から暴力を振るわれたり自殺を考えたことがあるという割合が高く、相談相手がいると回答した割合が低い（図表11、図表12）
- ・ 貧困が続いている場合、子どもが将来のために今頑張りたいと思えなかったり、自己肯定感が低い傾向がある（図表13、図表14）

<学年別 貧困継続状況>

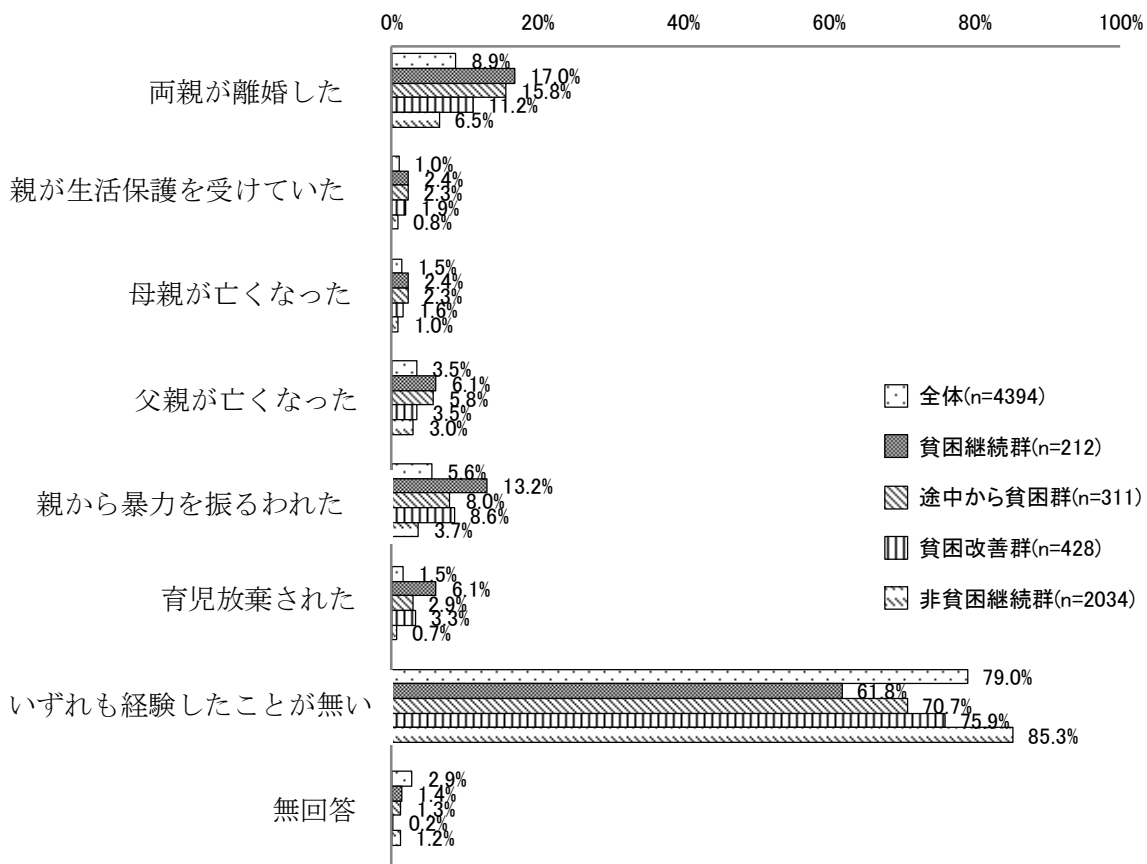
図表 8 【保護者】 貧困継続状況



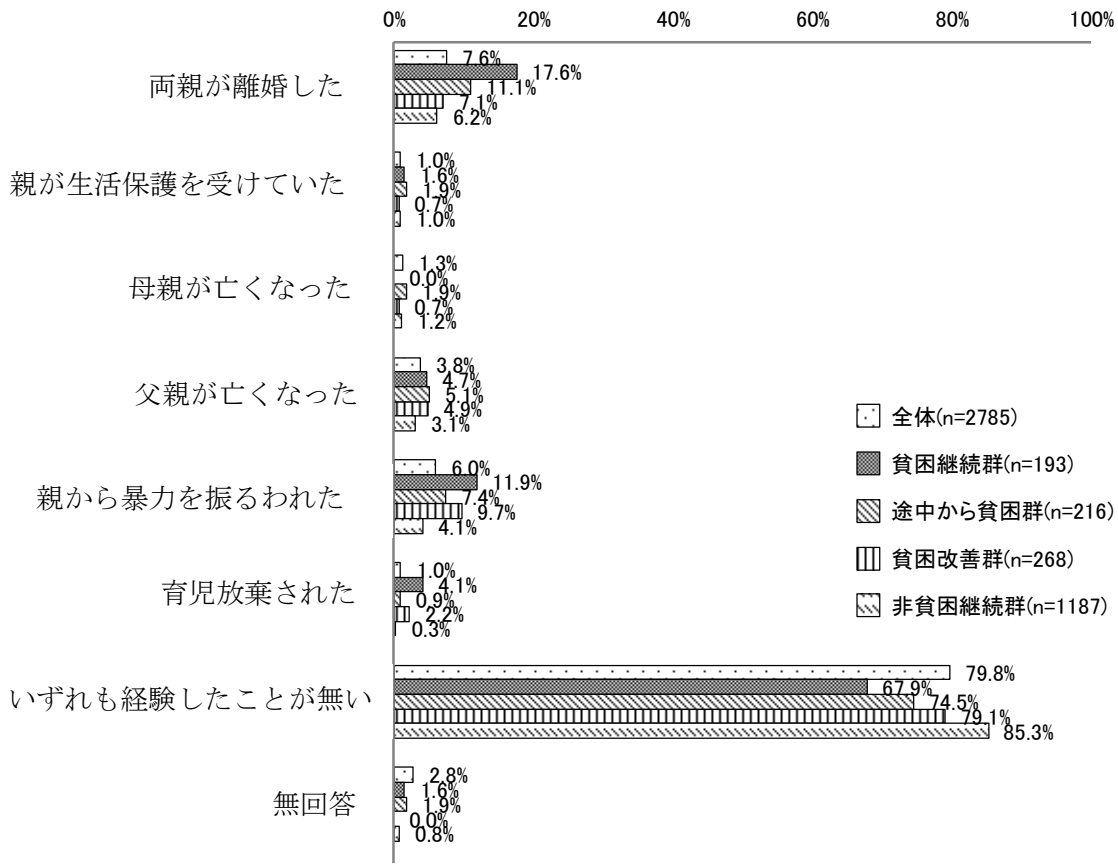
■ 関連項目

図表 9 【保護者】あなたが成人する前に体験したこと

<小学生保護者>

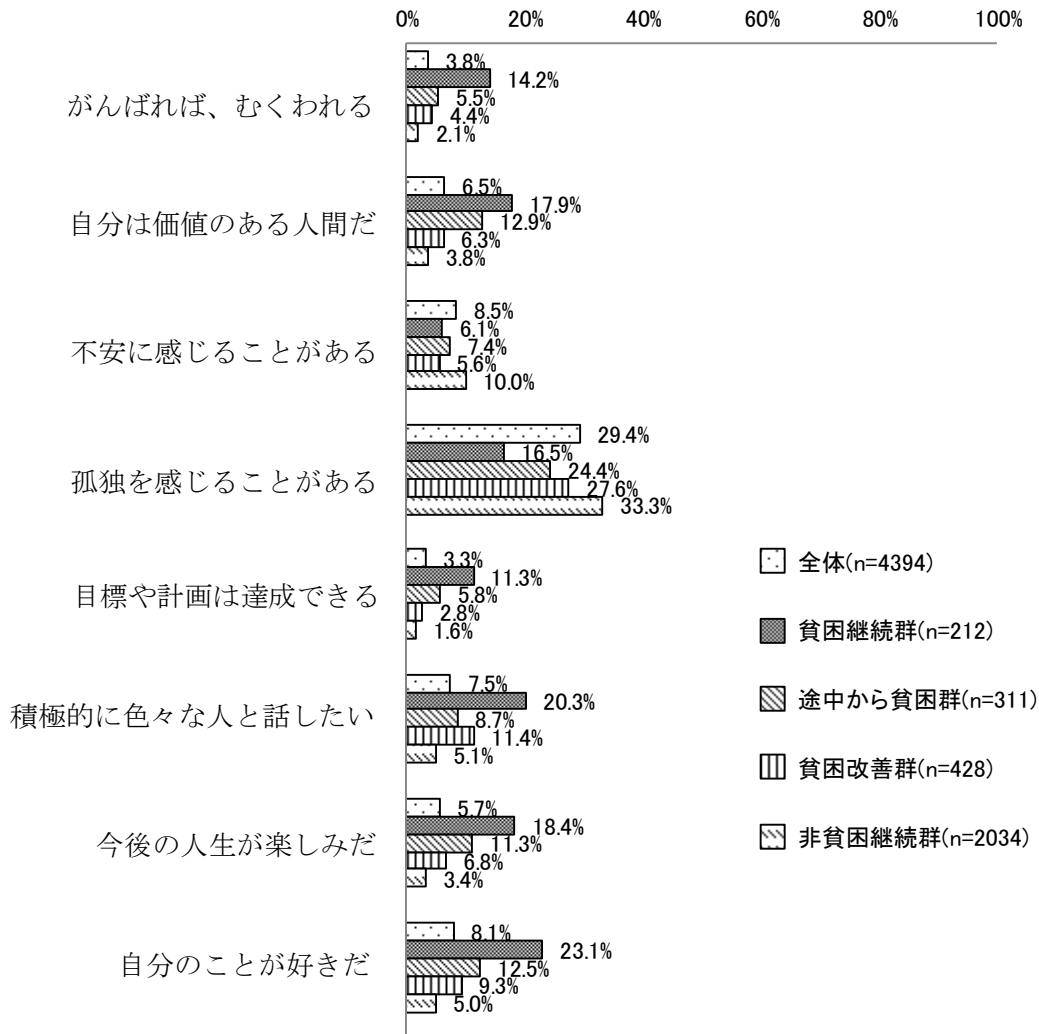


<中学生保護者>

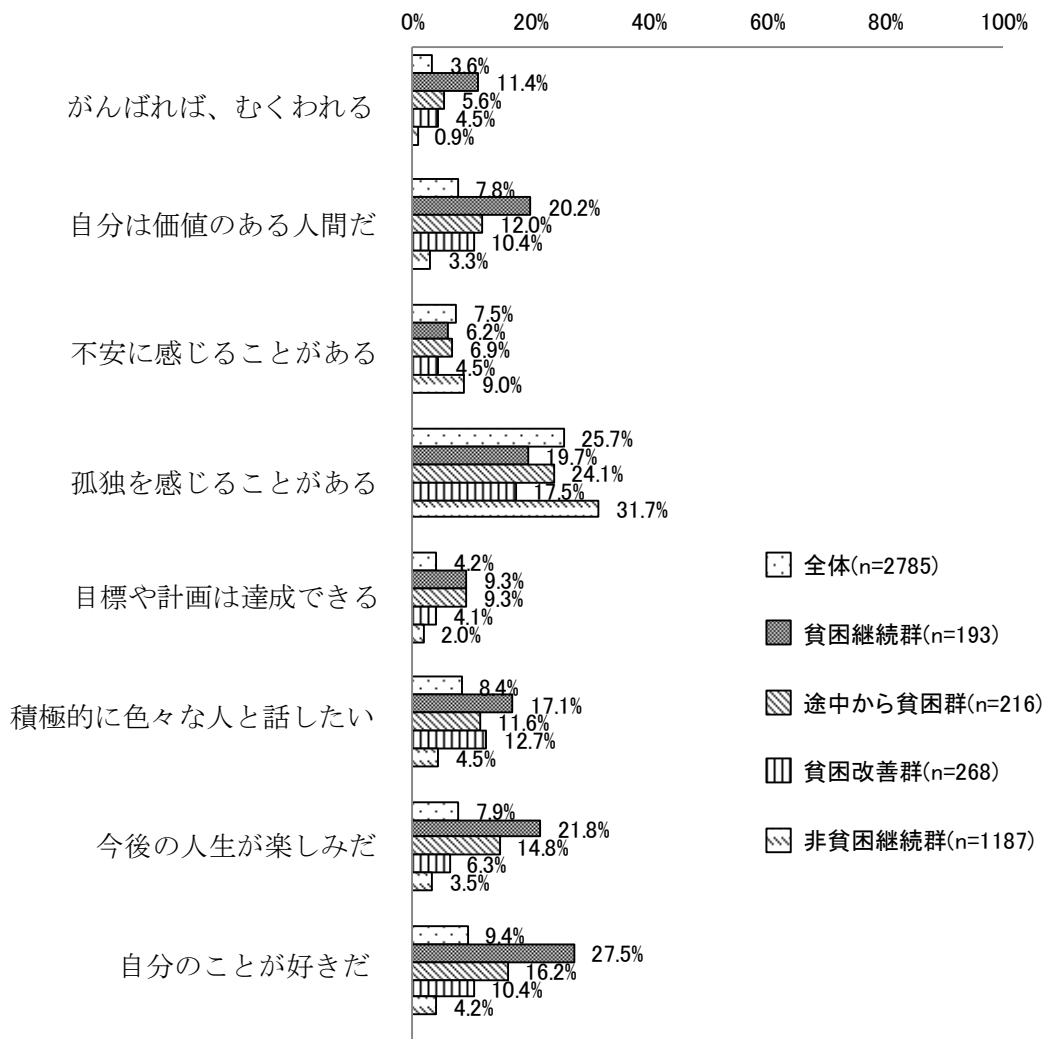


図表 10 【保護者】 あなたの気持ち（「思わない」の割合）

<小学生保護者>

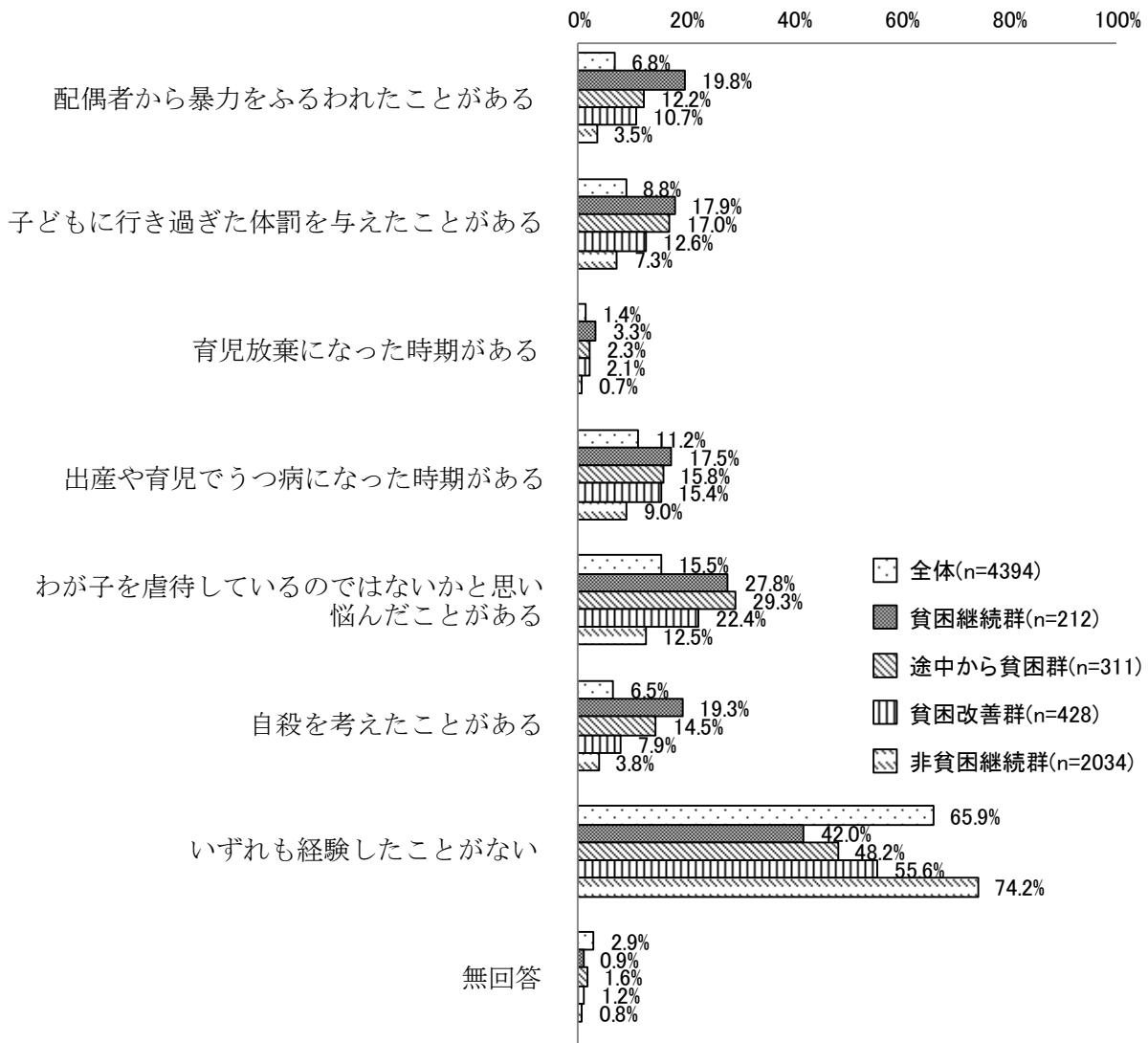


<中学生保護者>

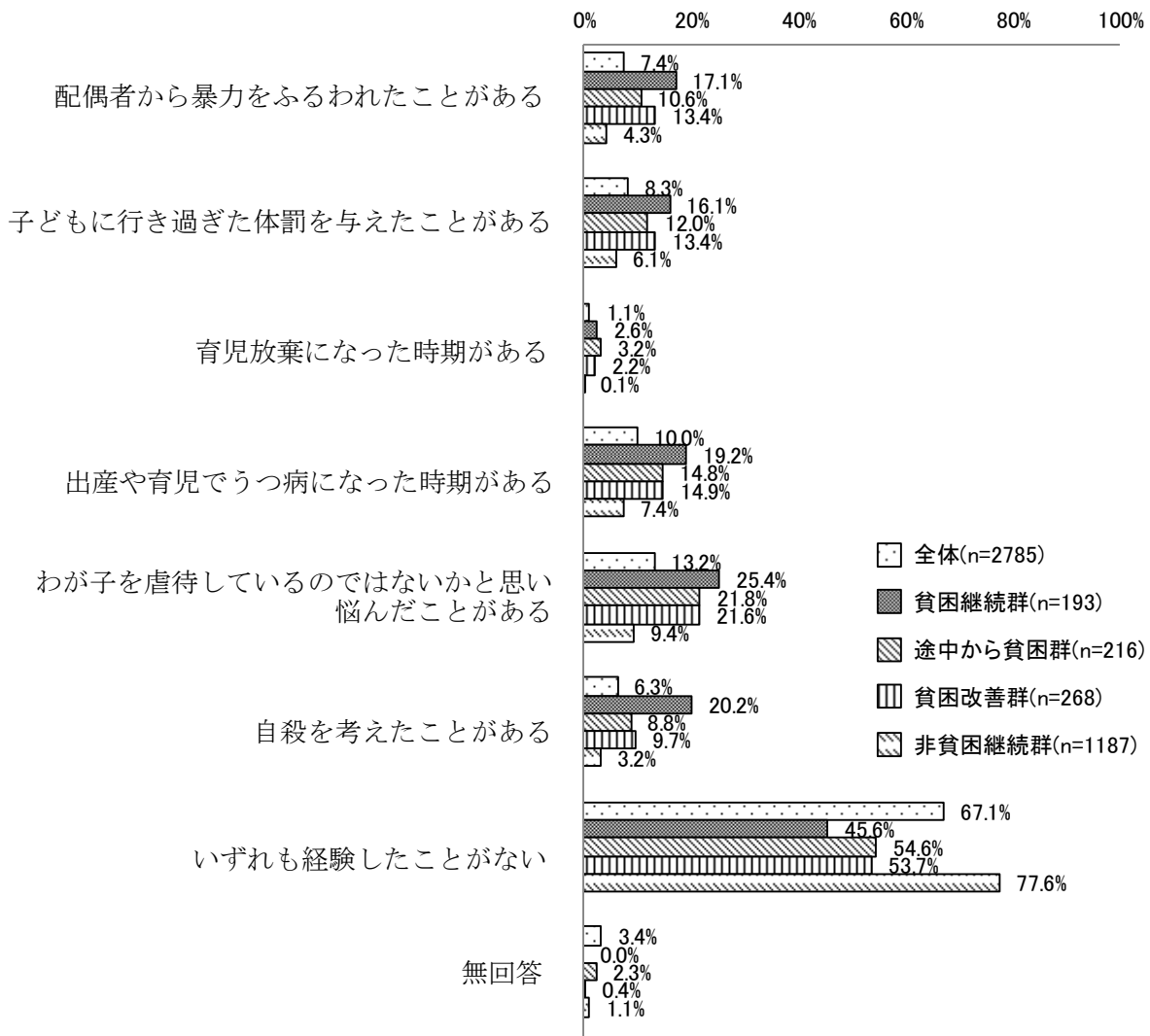


図表 11 【保護者】子どもをもってから経験したこと

<小学生保護者>

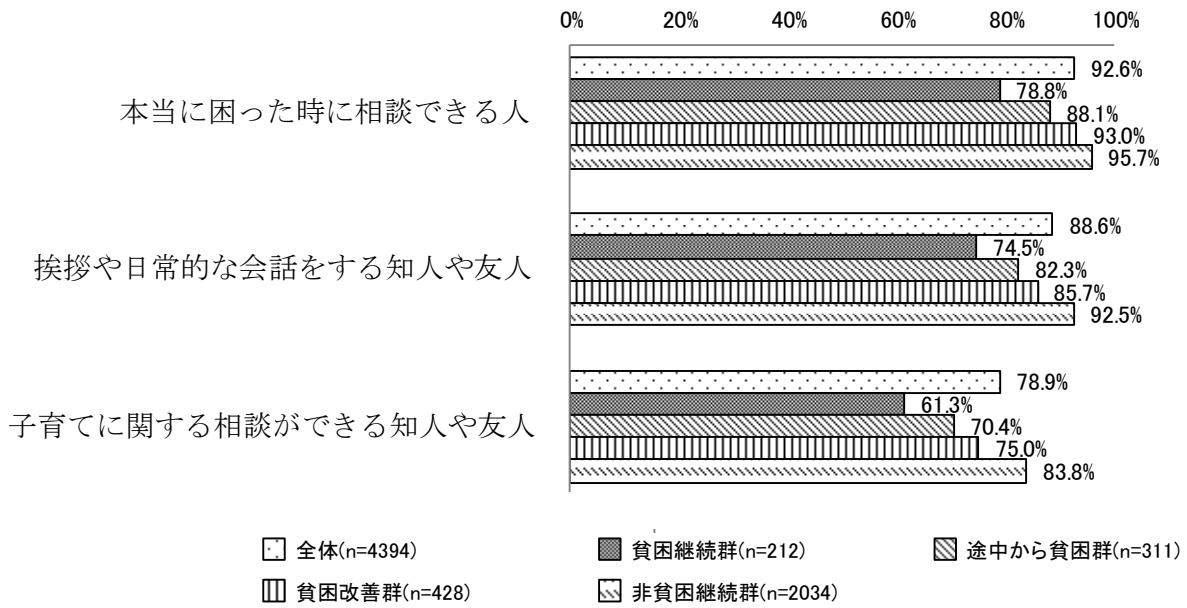


<中学生保護者>

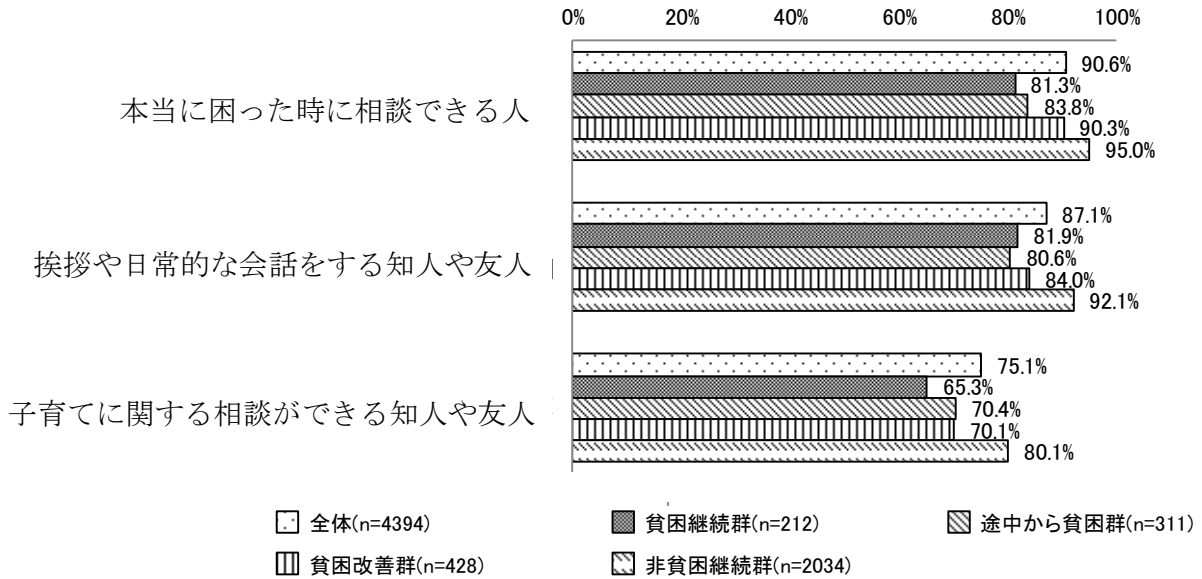


図表 12 【保護者】相談相手、近隣の知人・友人（「いる」の割合）

<小学生保護者>

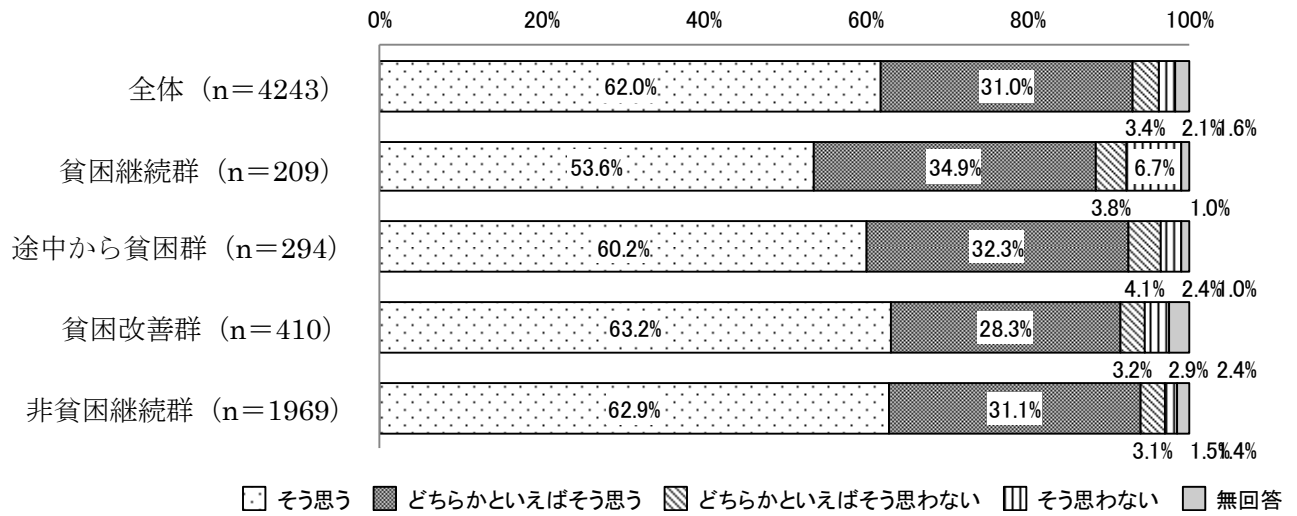


<中学生保護者>

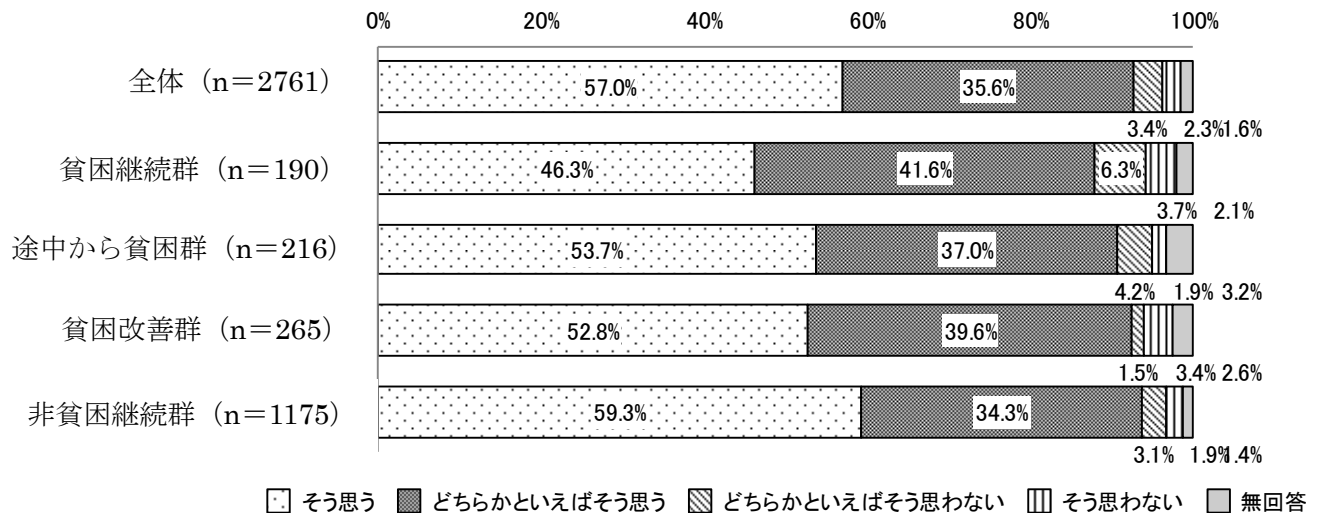


図表 13 【子ども】 将来のために、今頑張りたいと思うか

<小学生>

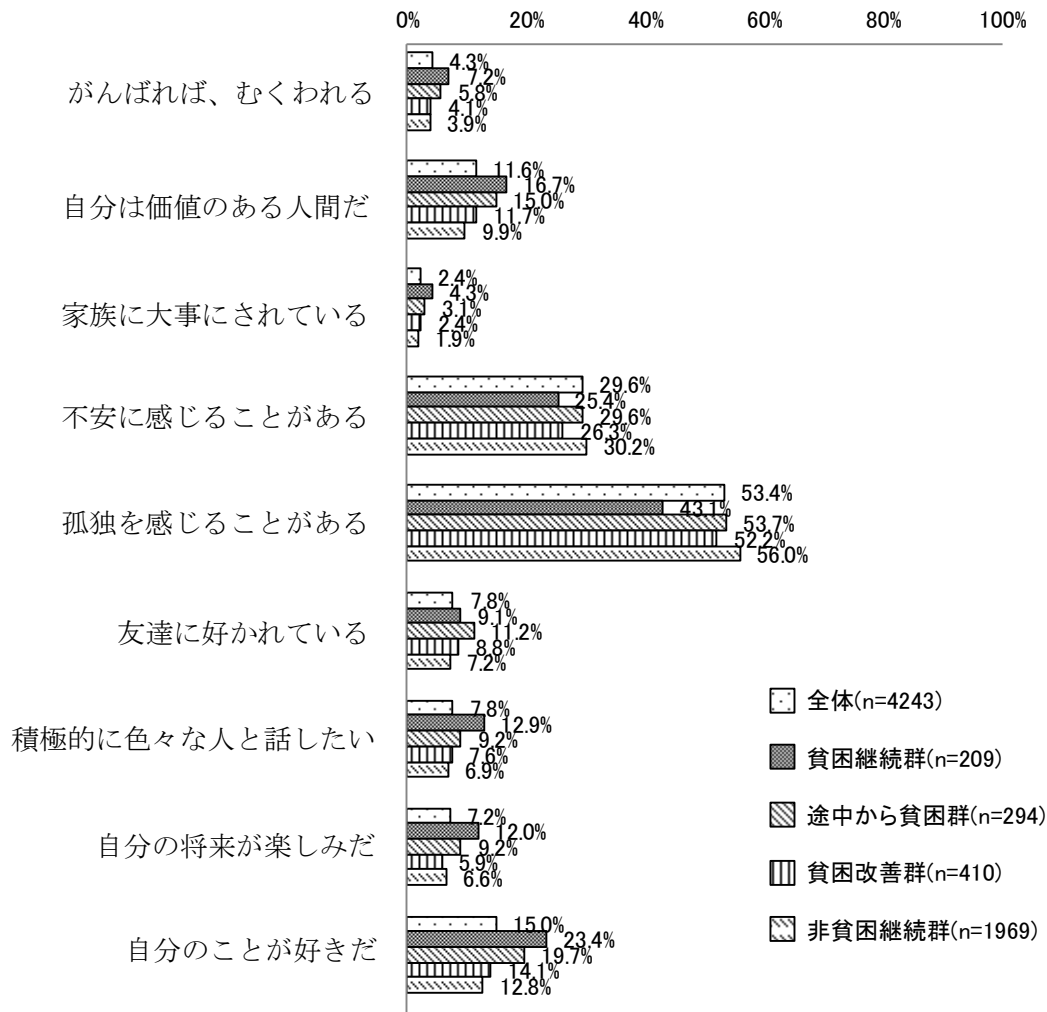


<中学生>

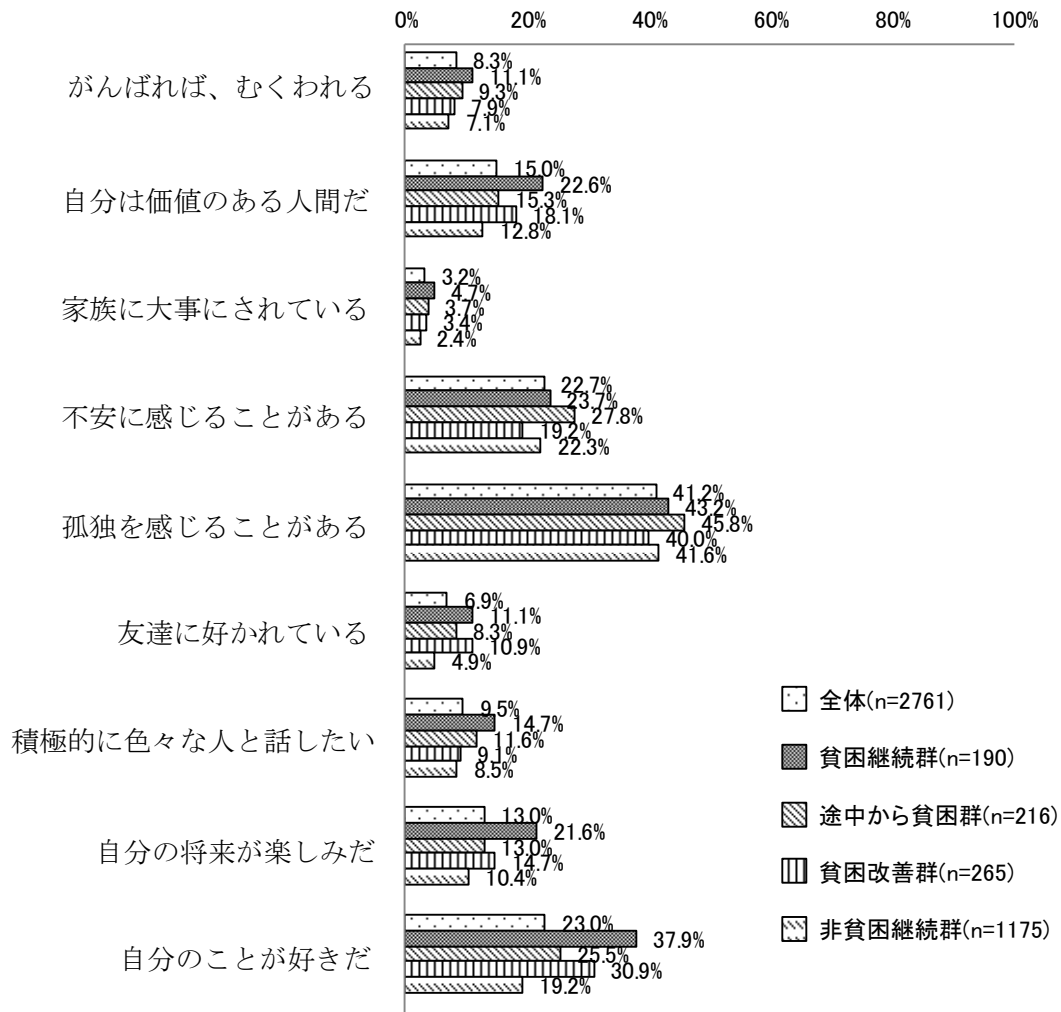


図表 14 【子ども】自己肯定感（「思わない」の割合）

<小学生>



<中学生>



3 【保護者国籍別】

外国籍の方への支援の在り方を検討するため、保護者の国籍の違いによる比較を行った。

■クロス軸の設定

「親の国籍」から以下2グループを作成

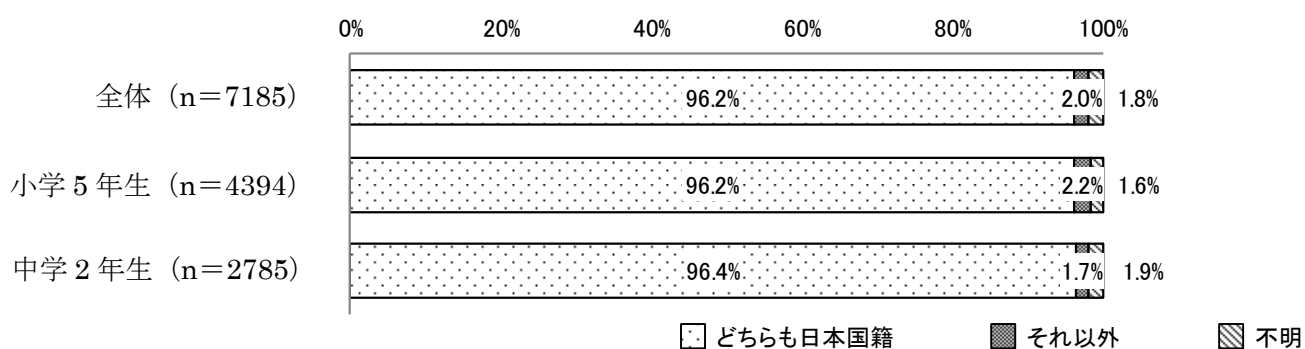
① 父母ともに日本国籍	② それ以外
-------------	--------

■結果概要

- ・ 両親のいずれかが外国籍である家庭は、父母ともに日本国籍の家庭に比べて困窮状況にある割合が高く、特に父親の就業状況が有期雇用である割合が高い（図表 16、図表 17）
- ・ 両親のいずれかが外国籍である家庭は、保護者が子どもと学校生活や社会の出来事の話をする時間が少ない傾向がある（図表 18、図表 19）
- ・ 両親のいずれかが外国籍である家庭は、相談できる相手がいない割合が高く、スクールソーシャルワーカー等については相談する窓口や方法がわからなかったという割合が高い（図表 20、図表 21）
- ・ 両親のいずれかが外国籍である家庭の子どもは、自分専用の勉強机など、使用できるものの割合が低い傾向がある（図表 22）

<学年別 保護者国籍>

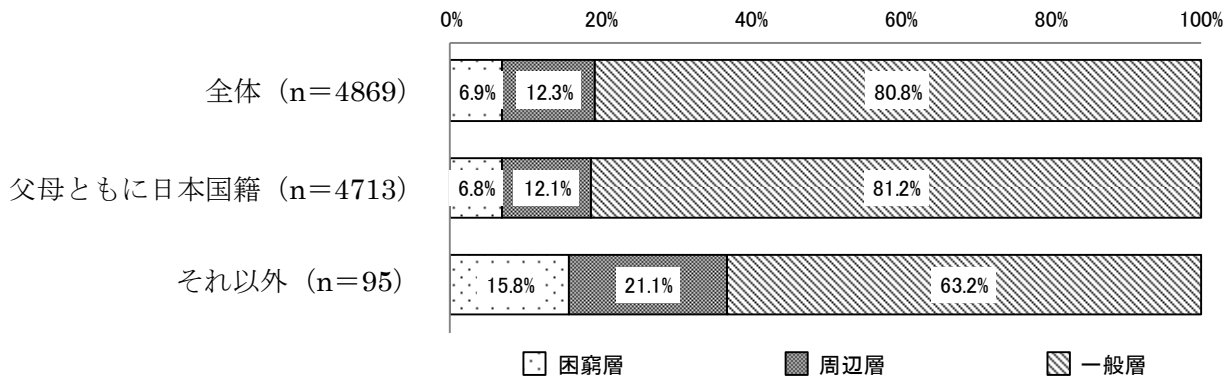
図表 15 【保護者】 父親・母親の国籍



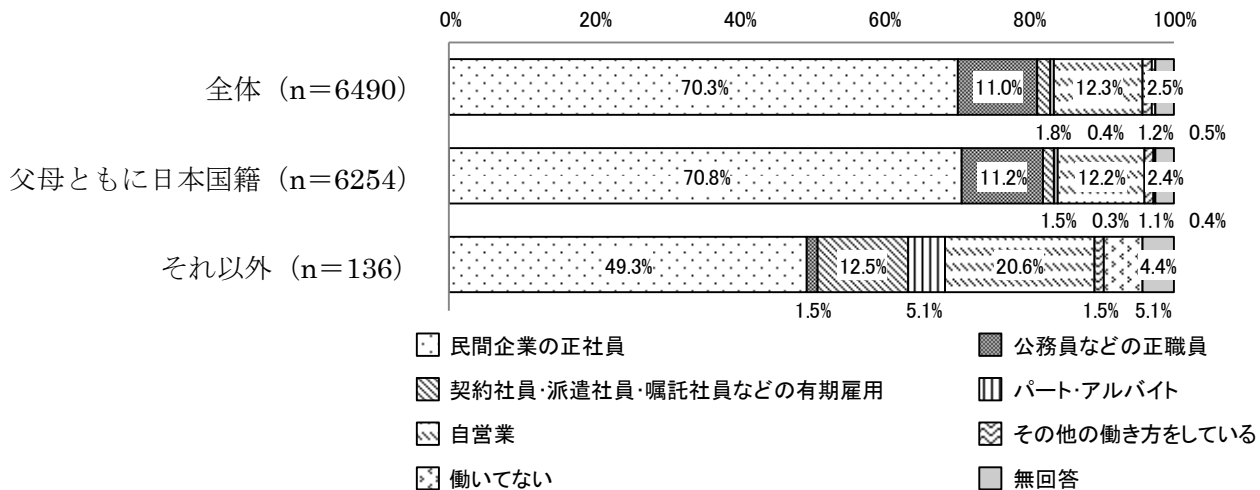
⇒ 「それ以外」のサンプルが少ないため、学年をわけずに集計

■関連項目

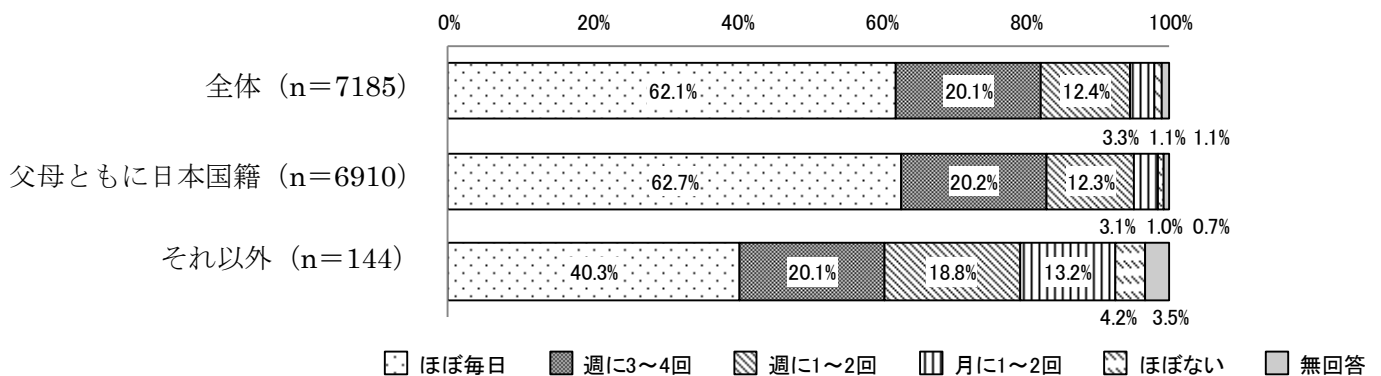
図表 16 【保護者】 生活困難度



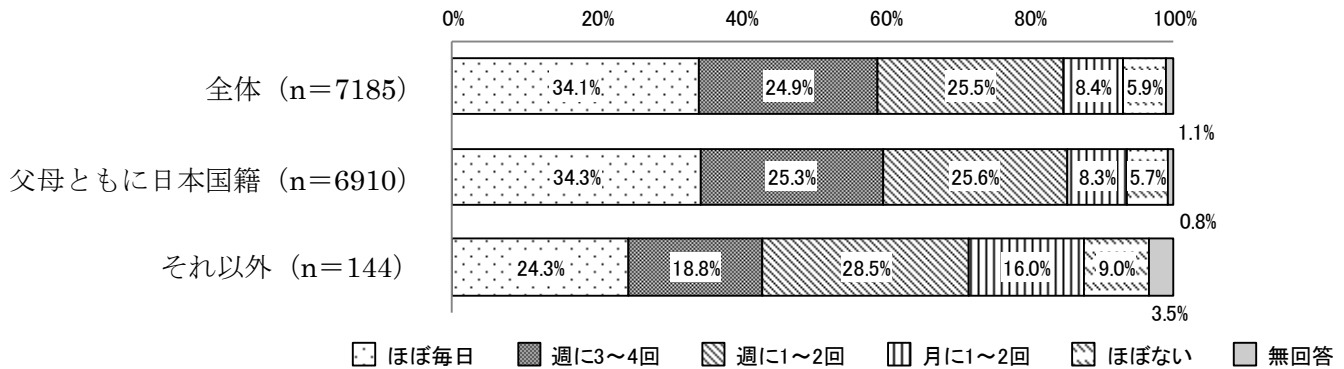
図表 17 【保護者】 父親の現在の就業状況



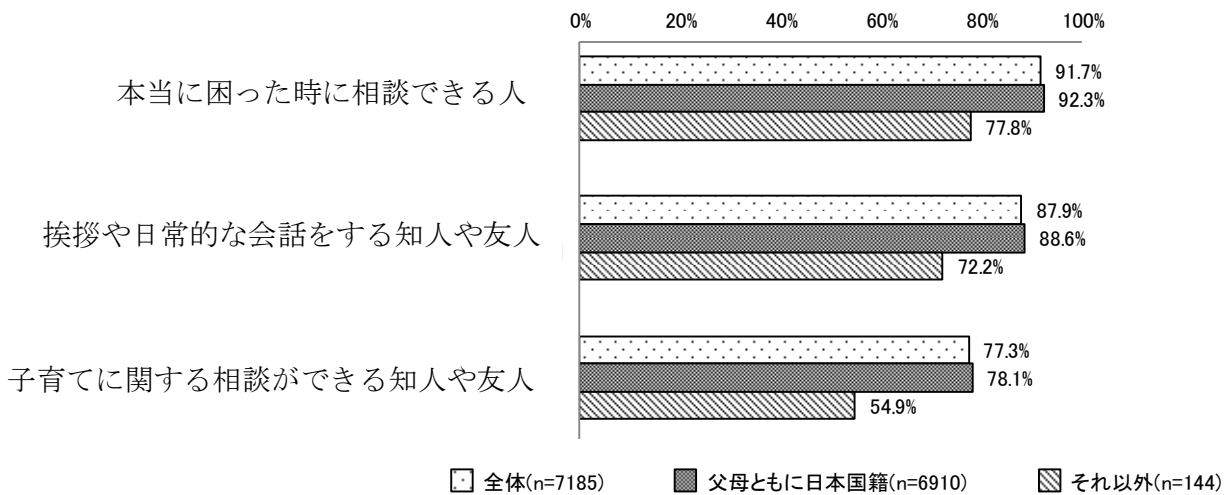
図表 18 【保護者】 子どもと学校生活の話をする



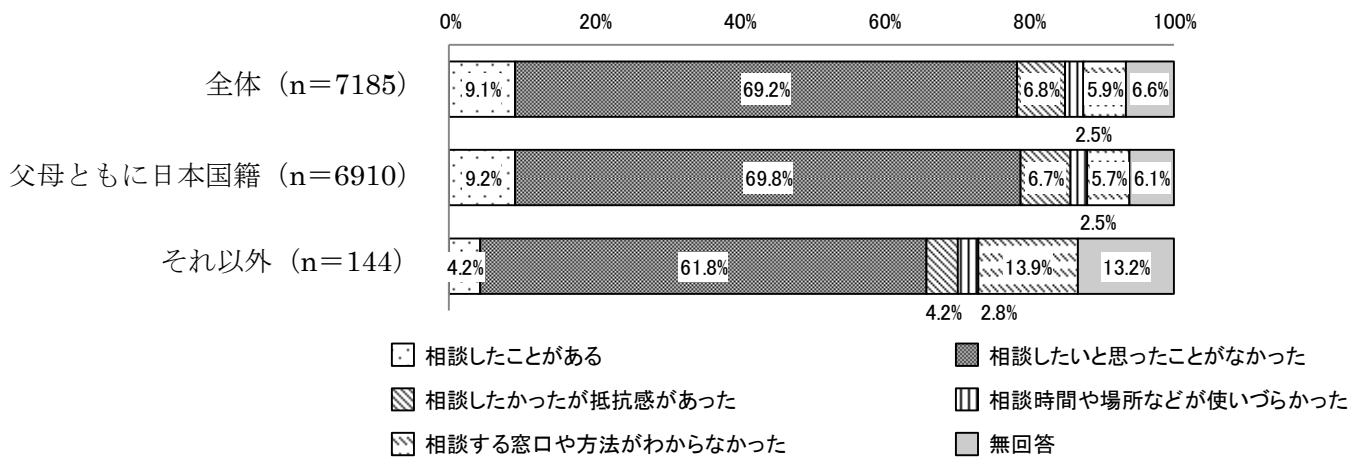
図表 19 【保護者】子どもとニュースなどの社会のできごとについて話す



図表 20 【保護者】相談相手や近隣の知人・友人（「いる」の割合）



図表 21 【保護者】スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーへの相談経験



図表 22 【子ども】 使用できるもの（「ある」の割合）

